お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
夏目　幾世	女　性	８ 歳	豊川市一宮町 （新城市海老）

「満蒙開拓団　苦難の歩み」

平成３０年８月２５日発行

「満蒙開拓と歩み」より転載

○　未知の満州へ運命の入植

昭和１６年（１９４１），そのころの私は三河の山村で祖母に父母，それに兄弟５人の一家８人の家族の一員として，平和で楽しい日々を送っておりました。私は末から二番目の二女でしたので，大東亜戦争が始まって，なぜ父が満州開拓団員として入植しなければならなかったのか，幼かった私には知るよしもありませんでした。

それも，家屋敷，田畑までも売却しての移住ですので，母の実家では大反対で子どもを皆連れてでも帰ってこいと言われるし，親類の人たちからも猛烈な反対に遭いながらもなお，とどまらない決断であったようです。

出発の日の記念写真

幸い１８歳の姉は嫁ぐことになっておりましたし，長兄は寄宿で高校に入る手はずであり，小学校４年生の次兄は，埼玉でお寺で大学まで面倒を見ていただく約束でありましたので，結局渡満は祖母と父母，それに末の妹と私の計５人で出発することになり，昭和１６年，生まれ故郷の三河を後にしたのです。

○　現地での生活

私たちが入植したのは，満州のチチハル市近郊（龍江省甘南県）でした。父は入植早々から総本部勤めで，用地買収等の仕事をやっていたようで，遠方まで足を延ばしているのかほとんど家にはおらず，帰宅するのは月に一度くらいでした。

そのころの生活を振り返ると，７０過ぎの祖母はもっぱら私と妹の面倒を任されているので，農耕には母が出かけていたようです。広大な農地を耕すには，一人ではとても無理なので，メンバーは班の人たちと中国人の苦力（クーリー）の共同作業であったのです。

入植地部落の風景

小学校へ入学するまでは祖母と妹との

３人で留守を守り，広大な耕地で働いている母の帰りを，今か今かと鶴首して待っていたものでした。夏はスイカ，カボチャ，ネギ，キュウリ，トマト，ナス，ダイコンなどいろいろな野菜が豊富にとれ，日本と変わらない収穫でした。

耕地の開墾

○　入植２年を過ぎて

９月も半ばを過ぎると木枯らしが吹くようになり，１０月に入ると朝夕には薄氷が張り出し，中旬以降からはもう寒い冬将軍の到来を知らせてくれます。厳寒の冬は氷点下２０度から３０度となって，外へ出ると針のような風が容赦なく肌を刺し，息をする蒸気で目も鼻も口も真っ白な雪氷でおおわれてしまい，顔の見分けもつかなくなってしまうほどです。

そのころになると「オンドル」の燃料にするために，家の中は大豆の殻や乾草（ヤンソウ）が山積みになっていました。そしてそれを適宜燃やしながら，暖かくなった部屋の中で祖母と私たちは，トウモロコシの実をもみほぐす仕事に追われ大変でした。

たしか，夜になるとオオカミの遠吠えが悲しげに，そして気味悪く聞こえたり，家畜のブタが泣きわめいて引きずられていくのを見たりして，怖くて震えていたことを思い出します。祖母は常々，「悪いことをするとオオカミが連れに来るぞ」と言って戒めてくれたことを思い出します。

入植２年目を過ぎたころでしたか，予期せぬ大水害の発生で，丹精込めて生育していた作物のすべてが流されて収穫皆無という悲惨な状況となり，身も心も苦しく脱落する者も出てくるという悲しい年がありました。村全員の会議で，最悪の事態を招いたことへの責任のなすり合いなのか，父は丸太でたたかれ右腕を負傷して帰宅したことがありました。病院にも行かず，「お国のために頑張るのみ」と腫れた右腕を抱えて我慢していた姿が，今も目に浮かんでくるのです。

○　魔の終戦

昭和２０年になって日本の戦況は利あらず，日ごとに悪化という情報が飛びかう中，男子には若い人から召集令状がきていたようですが，８月に入って運命の赤紙は，いよいよ父にも来てしまいました。父はその夜遅く，ランプのうす暗い明かりの下で，「サラシ」の白布に朱の手形を押し，文言を書き添えた「遺言状」

入植者家族の生活

を母に託して出征していきました。

そんなあわただしい状況の下で８月１５日を迎えてしまいました。終戦の報がいつどうして届いたのかは全く記憶にありませんが，そのころから開拓団の人たちは，私たちの家に寄り合ってはいろいろと相談をし，取り決めをするようになったようです。夜昼を問わず男の人が二人一組となって，２時間おきに各家を巡回していたようですが，ある時，警備の人が鉄砲を留守宅の玄関において家に入ったところ，満人がその隙をねらっていたのでしょう，大切な鉄砲を２丁盗まれてしまったそうです。

○　第一の犠牲者

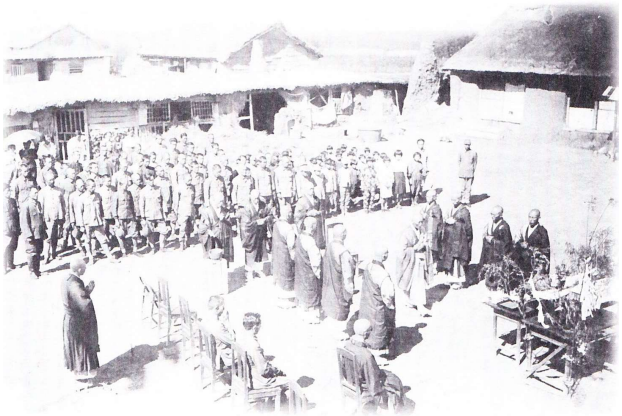
忘れもしない８月２５日のことでした。この日初めて匪賊の襲撃にあい，双方撃ち合いになったようです。この時はまだ団に武器がありましたので，団員は銃を撃ちまくることができ，このため相手方にかなりの負傷者が出て幸いにも逃げていったそうです。私たち女，子供はただ地面に身を伏せて静かになるまでじっとしていましたが，震えは止まりませんでした。

父はこの日に，チチハル市で兵役を現地解除されたといいます。そして，団のことや家族のことが心配だったのでしょう。取る物も取りあえず駆けつけたい一心で，単身，馬に乗って家路を急いでいたようです。

次の朝，父が親しくしていた満人が知らせてくれました。父は家のそば，わずか２００メートルの所まで来て，匪賊の負傷者に捕まり殺されてしまいました。刃物で滅多突きで左半身１８ヶ所も刺されたうえ，裸にされて捨てられていたのです。遺体には申し訳程度の土がかけてあったそうです。

団の人の配慮だったのでしょう，私たちの見た父は，頭から包帯が巻かれ，着物も着せてあり，そのうえに，形ばかりでしたが葬式もしていただくことができました。葬式の場で妹が，何も分からずに歩き回り，かわいい仕草をするので，団の皆さんの涙を誘っていたことを忘れることができません。団員の方々が幸い墓を掘ってくださったので，父には生前愛用していた着物をたくさん着せて埋葬したのですが，次の日には掘り起こされて丸裸にされ，衣類は持ち去られていたと聞き及んでいます。

無惨な父の死に様を見て，団の中は騒然となり，異様な雰囲気の中で父の葬儀が行われたようです。埋葬が済むやいなや殺気だった人たち１０数人があだ討ちに行くと言って，団長の制止するのも聞かず振り切って飛び出して



終戦前に行われた葬儀の様子

いき，また一人の犠牲者を出すやらさんざんな目にあってもどってきたのです。

○　開拓団占拠

このことがあってから，匪賊の襲来は連日続くようになり，団長は危険を察知して持っている武器のすべてを供出し，敵意のないことを伝え投降したのです。

厳しい監視の中での数日後，団の全員が広場に集結させられ，その場で１８歳から６０歳までの男は後ろ手に縛られ，荷車に乗せられていずれかへ連れ去られていきました。

残った人たちは，急に男手を取られてただぼう然とするばかり。何をするにもうまくいかず支障が続出，何とか戻してもらう方法はないかと相談した結果，お金で解決することを衆議一決，みんなで幾ばくかのお金を出し合って相手方に渡し交渉したところ，団長さんを除いて１週間ぐらいで返してくれました。しかし，団長さんだけは１ヶ月以上返してくれませんでした。そしてやっと返された時の団長さんの姿は，とても惨めで，これが本人なのかと見まごうほどの変わり果てようでした。「どんなひどい仕打ちをされても，みんなのことを思って堪え忍び，頑張ったよ」そう言いながら裸になって見せてくれた体は全身みみずばれでした。しかもなおよく見ると，あちこちにやけどの跡があって，それが化膿してただれ，大きな口を開けていました。

団長さんは監禁されてからずっと，毎日裸でつるし上げられ，潔く投降しなかった責任を納われていたそうです。ある時は竹でたたかれ，ある時は焼け火箸でせっかんされたと聞き，そのひどい仕打ちにみんな泣きました。

○　身体検査

団長さんが帰されてすぐ，団員全員が１ヶ所に集められ座らされました。もう武器がない私たちは，彼らの言うがままでした。彼らは私たちの回りを２ｍおきぐらいにそれぞれ銃を持って立ち，銃口を突きつけるのです。私はそれらの銃口からいつ火が噴き出すのか，それを思うと恐怖で体がすくみ，胸の鼓動は早鐘のように打ち出しました。そして，ただ祈る気持ちで彼らの動きをじっと見据えていました。赤ちゃんを抱いた母親は誠に気の毒でした。泣き叫ぶ赤ちゃんをあやそうと立ち上がると，「殺すぞ」と言って銃で小突くのでした。

また，別の日ですが，真っ暗で倉庫みたいな建物の中に，私たちは詰め込まれました。目が慣れてくると，仕切りのある部屋があってそこに小さな出入り口を設け一人ずつ中に入って身体検査を受けているのがみえました。中はローソクの明かりだけでしたので薄気味悪く，早く外に出たい衝動に駆られるのでした。ある人は胴巻きに入れてあるお金や小物を取られ，また，ある人は口まで開けられて何か隠してないか調べる始末です。裸にされた人もいたそうです。後ろの方にいた母は，仕切りに積んであった土のうに胴巻きをすばやくねじ込み検査を受け，

後で見つからないようにて取り出し，難を逃れました。この時の母の臨機応変な行動と手際のよさにはただただ感服，すごいのひと言でした。しかし，母のとったこの行動は，父を失った悔しさと自分が家族を守らねばという責任感がさせたのだと思って，今でも感謝しております。

○　飢えと屈辱の生活

ソ連の満州侵攻 HP「太平洋戦争は何だったのか」より

このような悲運な状況下で月日だけは過酷に過ぎていき，生きるためには何としても食べなくてはなりません。いつしか食糧も衣類もだんだん乏しくなり，心細い思いは募るばかりです。そんな時に今度は，ソ連兵が戦車に乗ってやってきました。「今度は全員殺されるぞ」との情報が入り，もう生きた心地はせず，ただひたすら無事を神様にお願いするばかりでした。

その日の朝，突然ごう音と地響きで目をさまし，外をのぞいてすっかり仰天してしまいました。戦車とトラックの部隊を先頭に大部隊が侵入してきたのです。トラックの後から馬に乗った兵隊が，銃を乱射して叫び声をあげながら押し寄せてきたのです。家の前を歩いていた男の人が撃たれて倒れました。兵隊は各家に土足で押し入り，時計や貴金属などのめぼしいものは片っ端から強奪し，そこに女の人を見つけると，容赦なく抱きついて乱暴していました。

匪賊やソ連兵，それに現地人も加わってのたび重なる侵入で，若い女の子たちは髪を切り男装をしてそのうえ顔に「すみ」まで塗っての生活でした。現地人の襲撃も日を追うごとに激しさを増して，家の中から次々と物がなくなってしまい，最後には「たらい」に漬けてある「オムツ」までも持って行かれる始末でした。現地人もだんだん悪らつになり，最後にはお金をどこかに隠しているだろうといっては，長い棒を持ってきて地面を突き刺して歩くという，誠に情けない状態となっていたのです。

○　東陽鎮へ移動

引き揚げ準備のためには東陽鎮の村がいいとの団長の計らいで，ここから２０㎞もある開拓団の村へ移動することになりました。移動にはどうしても荷車がいります。知り合いの現地の人にお金でお願いして送ってもらいました。東陽鎮の村の人たちは先に引き揚げて空き家になっていましたが，田んぼにはまだ稲が残っていたので，皆大喜びでした。

しかし，農機具は一切なかったので，みんな稲穂を手で摘むことになりました。摘

んできた稲穂を手ですごいて，それぞれビンに入れ棒で突いて玄米にし，それを持ち寄って雑炊にして食べました。大きなハソリ（大鍋）で煮た雑炊も，大勢で食べるので少しずつしかあたらず，いつもひもじい思いでいたことを思い出します。

父亡き後，７５歳の祖母を抱え，そのうえに幼い私たち二人を食べさせていかなくてはならない母の苦労は，大変だったろうと思います。

東陽鎮の村へ来てからも匪賊の襲来は何度もありました。ある時，満人がずかずかと入ってきて，家捜しを始めるのでした。そのころはもう荷物は毛布にくるんだわずかな物しかなく，満人は「品物はこれだけか」と母を小突くのです。母はこれだけは取られないようにという物を，オンドルの穴に押し込み隠していたのですが，「これだけしかない」の一点張りで，満人はそれでも何か隠しているのではないかと疑い，鉄砲の柄で頭をいやというほど殴られて気絶してしまったこともありました。

また，祖母は取られまいとして，着物を着れるだけ着て，見るからに厚着をしていましたので，１枚脱げと言われた時もありましたが，母は，病弱な年寄りだから許してと必死に頼んで難を逃れたこともありました。

現地人の中には，母に子供を連れていてもよいから嫁に来てくれと，何度も言い寄る人もいたそうですが，私は郷里に３人の子供を残してきたのだから日本に帰らなくてはならないのだと，はっきり断り続けたそうです。そんな状況の中，父がかわいがっていた満人が見るに見かねてか，私たち親子を引き取って小さな家でかくまってくれました。

そんなころ，元気のいい人たちは２００㎞もあるというチチハルまで引き揚げて行かれたようでした。

○　私の見た夢

ある開拓団では，足手まといになる８歳以下の子供を焼き殺して，大人と大きい子供だけで引き揚げたところがあると聞いて，とても恐ろしく身の毛がよだちました。当時８歳だった私には他人事ではなかったのでしょう。ちょうどそのころ，優しかった祖母が亡くなったのです。土葬はできないので野草を積んで火葬されました。「おばあちゃん熱かろうなあ」と心に焼きついて離れません。

それからは，いつも子供が並んで焼かれるのを待っている，「怖いよう，嫌だ，嫌だ」と言いながら自分が焼かれて骨になるまでの夢を見るのです。同じような夢を何度も見るのです。

また，銃口がいつ火を噴くかとその穴を見つめて，そこから目が離せない夢や，父を迎えに行くと言ってどんどん歩くのに，行けども行けども小高い丘が立ちふさがり，どうしても父に会えない夢，背中といわず腹といわず，鎌のような物が私の体に突き刺さるのです。幼年期の精神的なショックが大きかったのでしょう

か，神経的におかしいのではと気にもしましたが，これも１４歳ぐらいまでで，以降このような夢は見なくなりました。

南京袋をまとい船を待つ少女

○　最後の引き揚げ船

昭和２１年８月に入ると，残留者に「日本への引き揚げ船はもう最後になるのではないか」と伝えられました。これは便乗しないともう日本へは帰れなくなるということでしたので，母は急いで身支度をし，６月に亡くなった祖母の遺髪を父の爪を小さな袋に入れ，母は「これだけはどんなことがあっても持って帰らなくてはね」と，しっかり自分の体に巻き付けておりました。お世話になった満人が馬車でラハの駅まで送ってくれました。

私と妹の幼子二人を連れての道中，この数日間はとても口には言い表せない苦労の連続であったようです。８月の末に，やっとの思いでコロ島に着き，港で待っていた日本の船に乗ることができた時は，母はもう精も根も疲れ果てたのか，その場に座り込んでしまいました。

体力の限界まで頑張ってきた母も，つい気弱になって，「なあ，日本に帰ってもだれも生きてないかもしれんから，ここで一緒に死のうか」と船の甲板に連れて行かれ，飛び込もうとするのですが，私と妹で「死ぬのは嫌だ，死ぬのは嫌だ」と両手を引っ張りすがりつくものだから，やっとあきらめて船室に戻ったのです。次の日もやはり同じことをしましたが，もう私たちの力の方が強く，皆で泣きながら船室へ下りて死ぬのは思いとどまりました。

満州からの引き揚げ者　博多港から駅に向かう人たち,リュック一つに全財産を詰めて内地での生活再出発せねばならない。
日本生活文化史　河出書房より

○　戸惑う母の郷里

佐世保の港に入って，伝染病の検査で足止めをされ，上陸が許されたのは昭和２１年１０月１８日，引き揚げセンターでも１０日以上泊まって，母の郷里の北設楽郡東栄町に着いたのは１１月に入ってからだったと思います。途中，豊橋駅を過ぎるころは夜になってしまい，ここが豊橋だと言われましたが，町にはわずかな電灯しかついておらず，真っ暗やみの町でした。

母の郷里には小さな子供が７人もいて，母の兄も実母も亡くなっていました。私たちの突然の帰郷に戸惑いは隠しきれず，まさに招かざる客で本当に迷惑だったと思います。母と私たちは，すぐには家にあがれませんでした。戸外でかまど

を仕立て，アカでまみれた着物を脱ぎ，全部煮沸消毒をしてそこで体を洗ってやっと上がることができました。

着いたその晩は叔父の所で泊まることになり，独り者の叔父が作ってくれたのが，大麦のお粥でした。お腹が空いていたので思わずいただきましたが，私と妹は，次の朝から突然のひどい下痢をおこしてしまいました。母は，「子供には白いお粥を」と言えなくて，私たちに我慢するようにと小声で知らせるのです。

翌日から母は実家での野良仕事に出て行きました。私たちも下痢の続く体で里芋などの皮むきなどをして働きました。母の父は存命でしたが実権はなく，ただ心配なのか，おろおろするばかりで気の毒でした。

私たちの渡満を強く反対した人々の中にもどってきたのですから，それみたことかと言わんばかりの態度に，母はまるで針のむしろに座らされている気持ちだったのでしょう。親類へのあいさつ回りをしても，いい顔一つしてもらえるはずはありません。ある家では，「なんだあんたか，何しに来たの，何か用事なの」と冷たくあしらわれ，借金でもしに来たのかと思われたのか，中に入れとも言われず，おまけにさげすんだ目で見られる扱いに，母は悲嘆の涙を禁じ得なかったのでした。そして母は，もう二度とこの家には来ないし，親類からの借金は絶対にしてはならないと心に誓ったのでした。

（後略）

渡満前の実家

＜その後のこと＞

・東栄町の母の実家に２ヶ月ほどお世話になる。
・三都橋の父の姉（伯母）の家に移る。
　祖母と父の葬儀を行う。３ヶ月お世話になる。
・海老に移り，長兄の２ヶ月ほど世話になる。海老小に入学（３年生の３学期）。
・昭和２３年３月，一宮町に移る。４年生に編入。
・昭和２４年２月，長兄の死
・昭和４６年５月，桜淵に拓魂碑建立される。
・平成２年９月，旧満州東三河郷開拓団部落（現：黒竜江省甘南県）を訪問。
　現地に残留された８名と再会。